２０２０年度
大学院奨励研究員研究報告書

2021 年 3 月 31 日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	三隅　貴史　　印

指導教員

所属・職名	社会学研究科・教授
氏　　名	島村　恭則　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	神輿会の民俗学的研究： 「価値をめぐる闘争」からみる江戸・東京の祭礼史
採用期間	２０２０年　４月　１日　～　２０２１年　３月　３１日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先：　所属研究科事務室

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	第71回関西社会学会大会	開催地	オンライン開催 （龍谷大学）
題目	神輿渡御と「価値をめぐる闘争」： 祭礼研究における解体論的視角を超えて	発　表 年月日	2020年10月11日

学会名	2020 Virtual Annual Meeting of the American Folklore Society	開催地	オンライン開催 （オクラホマ州タルサ）
題目	The Possibility of Re-Establishing Order in Festivals: With Special References to *Mikoshi* Parades in Tokyo Metropolitan Area	発　表 年月日	2020年10月15日

学会名	現代民俗学会 第50回研究会	開催地	オンライン開催
題目	「記述の学」を超えて： 現代民俗学の方向性にかんする一考察	発　表 年月日	2020年10月25日

研究経過状況（３０００字程度）

研究期間中は博士論文の執筆に注力し、博士論文の草稿を完成させた。以下では、筆者の博士論文の概要を記述する。

筆者の博士論文は、現代の東京圏の神輿渡御における地域外参加者「神輿会」（年に複数回、祭礼やイベントにおいて神輿を担ぐことを続けている神輿愛好家による集団。東京圏に900団体以上存在する）と、町会（氏子たちを中心とした祭礼運営の組織）、そして、神輿渡御・神輿パレードの主催者などの実践と、かれらのあいだでの「価値をめぐる闘争」の歴史的展開に注目した民俗学的研究である。全10章で構成される。

第1章「『民俗学的研究』の三つの方針」では、本論文が「民俗学的研究」を称することに込められた含意について述べた。まず、今後の「より良い」民俗学的研究の方針として、①民俗概念転換方針、②反標本方針、③中範囲の理論化方針の三つの方針を提示した。そして、この意味における「民俗学的研究」を、東京圏の神輿渡御、そして神輿会というものを事例として体現することを主張した。

第2章「本論文の目的と分析視角」では、本論文を貫く問いを示し、先行研究の批判的検討を行ったうえで、本論文の分析視角を提示した。本論文を貫く問いは、東京圏の神輿渡御は、各時代を生きる人びとにとって、どのように価値づけられてきた／いるのかである。先行研究は、この問いにたいして、①社会統合論：神をとおした社会統合の行為、②自己充足論：神が忘れられた個々人の楽しみのための行為、③対抗論：対抗のうえで成立している行為という三種類の回答を与えてきた。しかし、それぞれの視角には、いくつかの問題がある。そのため本論文では、東京圏の神輿渡御を、価値をめぐる闘争、つまり、神輿渡御に固定的で不可逆な帰結をみいだすのではなく、異なる価値づけを行おうとするアクターのあいだでの闘争のその時点での決着にもとづき、異なる帰結が立ち現れる行為として分析することを論じた。

第3章「東京圏における神輿と神輿渡御」では、本論文が研究対象とする神輿と神輿渡御にかんする民俗学的研究と、東京圏における一般的なありようについて説明した。

第4章「神輿会のエスノグラフィー」では、神輿会の概要、A神輿会の概要、祭礼の場におけるA神輿会の実践、A神輿会内部における人間関係、A神輿会の男性性、A神輿会と他の神輿会の互酬的関係、A神輿会の社会階層、神輿会とナショナリズムという八つの論点について、「右肩」と「左肩」という民俗語彙を参照しながら描写したうえで、神輿会にとって神輿担ぎとは何かを明らかにした。この視点から筆者は、神輿会にとっての神輿担ぎを、一定程度「右肩」を「左肩」で塗装しながらも、隙あらば「右肩」を実践して自己充足を達成しようとする、微妙さが内包された両義的行為だと総括した。

第5章「町会・青年部による祭礼運営のエスノグラフィー」では、町会の概要を説明したうえで、町会による祭礼運営のありようについて記述した。そのなかで大きな論点として提示したのが、神輿渡御において、町会が神輿会をどのように管理し、町会による権威的配分を成立させるかという点である。このことから、町会にとって神輿渡御とは何かという問いを、自分たちの祭りが「良い」ことを内外に表明し、満足感を得るための行為と総括した。そのうえで、町会と神輿会にとって神輿担ぎとは何かという問いを総括して、神輿会と町会が対抗することによって、東京圏の神輿渡御の熱気が生み出されていることを指摘した。

第6章「江戸・東京の祭礼史」では、江戸・東京の祭礼史において、神輿会の成立・拡大（1950年代後半～）を重要な出来事として位置づける視点から、江戸・東京の祭礼史を四期に分けて説明した。すなわち第一期は、天下祭における形式性と周辺祭礼における乱痴気騒ぎの時代、第二期は、町神輿の発明と町会による権威的配分の時代、第三期は、町会と神輿会との闘争の時代、第四期は、町会による権威的配分と社会－祭礼関係の時代である。そのうえで、町神輿が発明されたことにより、神輿の担ぎ手が大量に必要な環境が生じたことこそが、東京圏の神輿渡御を規定していることについて論じた。

第7章「『江戸前』の美学の創造・拡大・定着」では、東京圏においてなぜ「江戸前」の美学と総称可能な支配的な表現（服装、所作、身体加工など）が「格好良い」、あるいは、「正しい」表現であるとされ、美学の「標準化」が進展するにいたったのかを論じることを

とおして、1960年代から80年代前半にかけての町会と神輿会とのあいだでの、美学をめぐる最初の闘争を描き出した。この闘争から筆者は、現代の東京圏の祭礼間では表現にかんする美学が成立していることによって、複数の祭礼における表現に「標準化」（美学に準拠する方向へ変化する現象）と「差異化」（美学との差異を強調する方向へ変化する現象）が生じていることを指摘した。

第8章「神輿渡御における共同性はいかにして可能か」では、祭礼に自己充足の価値づけを行う地域外参加者が多数を占める東京圏の神輿渡御において、なぜ秩序だった神輿渡御が可能なのかという問いをとおして、高齢化・人口減少時代の祭礼における共同性について論じた。現代の神輿渡御において秩序が可能な理由は、神輿渡御の三者関係が成立しているからだ。神輿渡御の三者関係とは、町会－町会に協力的な神輿会－自己充足を優先する神輿会の三者関係によって神輿渡御が成立していることをさす。その結果、町会は、秩序だった神輿渡御と共同性を成立させている。このように、三者関係にもとづいて東京圏の神輿渡御において共同性が再成立している状況を、社会統合論の文脈から地域の再統合と総括した。再統合とは、地域外参加者の貢献によって、町会にとってあるべき神輿渡御が成立したことによる、その地域に愛着を持つ人びとのあいだでの共同性の再成立をさす。

第9章「神輿を担ぐことの文化政治」では、現代東京の神輿渡御・神輿パレードにおける神事のありようとはどのようなものかという問いをとおして、柳田國男の理論「祭から祭礼へ」のその後を考察した。現代の三社祭や奉祝系神輿パレードにおいて神事や伝統が強調・創造されている理由は、主催者による祭礼の神聖化の影響である。祭礼の神聖化とは、高尚な意味を強調する言説によって、祭礼の混沌を縮小させ、秩序を達成しようとする戦略をさす。以上の議論ふまえ、柳田と自己充足論にたいしてイベントから「伝統」へと付けくわえた。イベントから「伝統」へとは、イベントが町内だけにとどまらない担い手によって行われる、主催者による神聖化と参加者による受容によって混沌が縮小し、秩序が達成されているものへとなりつつある行為、つまり「伝統」になったことをさすものである。

第10章「結論」では、ここまでの議論をまとめたうえで、本論文の展望と課題を示した。

以上の博士論文を、2021年度春学期中に提出する。そして、提出後は、本論文の書籍化にむけた取り組みを行うほか、博士論文によって浮かび上がった課題の理論的な洗練と、他の事例での検証の双方から、さらなる研究を進める。

以　上